

(最近、そうではないかと思ったこと その2)



昔、ロシア文学科の学生だったので、チェーホフを読みました。

その中で、ある人の問いに「正妻が医者、作家は妾」というようなことをチェーホフは答えていたと書いてありました。

それを読んだときに、僕は意外に思い、しばらく考えた後にこう推測しました。

「ひとつは、謙遜。いまひとつは、世の中の役に立つには、その方が実効的で実質的だともったのだろう」と。

なぜなら、当時のロシア社会では、「客観的で中立的」なチェーホフの作品は、美しいけれど透明すぎて世の中の改革には役に立たないと評されていたからです。改革の役に立つのは、主張や訴えのはっきりした色の濃いドストエフスキーやトルストイなどの作家だと。

それに対して、自分はそのことには、医学で貢献しているんだという反論の意味合いと自分自身に対する意味づけを付与したのだと思ったからです。

しかし、最近、自分が、お金は頂けないものの、好きなように物を書くようになってみると、チェーホフの言葉に対して、別の感想を抱くようになりました。

「自分の思ったことを自分流の表現で書きたい、自由に書きたいから、その姿勢を守れるようにするために、敢えてそういったのでは？」と。

チェーホフは若い頃、貧しい医学生で、学費稼ぎのために、ショートショートや短文、短編を売って苦学をしていました。おそらくその頃は、食いつなぐために、書きたくもない内容や結末を原稿依頼主や読者の評判に応じて、作ったり、書き足したり、オチを書き直したりしたのではないかと思います。簡単に言うと書きたいように書けなかったではと思ったのです。

そんなチェーホフは、お金の魔力を知っていた。お金のために作家は書き換え、書き直した

りもする。意に沿わないオチもつけるし、ストーリーも作る。それに縛られず、自由に書きたいことを書きたい方法で書くには、少なくとも出版社や編集者に対しては、

「作家活動に重きを置いていませんよ、本業は医者で作家は余技ですから、お金に頓着はしませんよ。既に生計は立っていますからね。だから自分流のやり方で好きなように書かせてくださいね。僕は僕なりの方法で改革をしますから。あまり当てにしないでくださいね。そっとしておいてくださいね」

と言う煙幕を張るか、隠れ蓑にして目をそらすためにあのようなことを言ったのではないかと思えるようになったのです。

と言うことはチェーホフにとって「正妻はあくまでも作家、医者は世間を欺くための妾」だったのではないかと僕は推測を変えたのです。

不思議なことですが、実際に書いていなかった学生の時には、ああ思い、実際に書くようになった今は、上述のように思うようになったのです。くり返しになりますが、

「正妻は作家。医者は妾」と。